

歯科基礎医学会では、わが国の「2040年問題」に向けて近未来の歯科はどのように展開していくかというロードマップに4つの課題を掲げ、健康寿命の延伸への貢献を目指しています。第62回歯科基礎医学会学術大会（鹿児島）において、第2回歯科イノベーション・ロードマップ・シンポジウム「がんの発生と制御への挑戦」を開催致しました。

口腔がんは、直接観察できる口腔内に発生するにも関わらず、5年生存率の改善は未だみられません。口腔という高度な機能を有する器官の特性上、進行するとQOLが著しく低下するため、口腔がん撲滅には、早期発見・早期治療が最も有効な医療行為であり、特に早期発見に歯科医の関与は欠かせないのです。口腔がん撲滅へのロードマップとして、早期口腔癌を「知る」、「診る」、「治す」の3期に分けて研究を展開し、新規治療開発へと繋げたいと考えています。

本シンポジウムでは、第1期「早期口腔癌を知る」—早期口腔癌の発生・進展メカニズムの解明—に焦点を当てました。座長は大阪大学 豊澤悟教授と当方が務め、鹿児島大学 杉浦剛教授、大阪大学 宇佐美悠講師、九州大学 藤井慎介講師および九州大学 山元英崇准教授の4名のシンポジスト（歯科医師3名、医師1名）による講演を企画しました。

まずは本学会 井上富雄理事長によるオーバビュー（当方代行）、そして上記4名のシンポジストから癌発生に関与する最先端研究をご紹介します。杉浦先生には、臨床の立場から新たな時間軸を重視した診断法の開発として、うがい液による口腔潜在的悪性疾患および口腔癌の超早期診断、血清miRNA をバイオマーカーとする口腔癌のリアルタイムモニタリング、および口腔癌循環癌細胞の分離によるリアルタイムシングルセル解析について、宇佐美先生には、ヒト組織における発癌過程の解析、特に前癌病変や早期癌に関する研究は困難であることからマウス発癌モデルの作出とその有用性、そのモデルを用いた発癌過程における血管形成の変化とその分子機序について解説して頂きました。また、藤井先生には、癌における増殖および分化転換の新規分子基盤として、癌の発生に伴って癌周囲に触れる硬結（細胞外環境の変化）が腫瘍形成に与える影響と悪性度の高い腺扁平上皮癌においてDNAメチル化が分化転換に与える影響という知見の紹介、山元先生には、高リスクヒトパピローマウイルス(HPV)感染が約60%に認められる中咽頭扁平上皮癌(OPSCC)の臨床病理学的特徴やHPV検出方法における注意点、口腔癌や喉頭癌における高リスクHPV感染率との差異およびHR-HPV陽性OPSCCにおける特徴的なRb蛋白発現パターンとp16を組み合わせた免疫染色がcost-effectiveなHPV感染のsurrogate markerとなる可能性についてご講演頂きました。先生方の大変興味深い新知見を踏まえ、さらに口腔がんに対する挑戦を続け、第2期の「早期口腔癌を診る」—早期口腔癌の診断法の開発—、第3期の「早期口腔癌を治す」—早期口腔癌に対する新規治療法の開発—に繋げ、「がんの発生と制御」へと邁進したいと思います。

最後に、新型コロナ感染拡大のため本学術大会はWEB開催となり、シンポジストの先生方には音声付き動画ファイルの作成、更にディスカッションパートでは皆様に時間調整の上、事前収録をお願いすることになりました。これ迄のシンポジウムとは大きく異なった形式となりましたが、シンポジストの先生方のご協力および大会である鹿児島大学の先生方のご尽力により無事本シンポジウムが開催出来ましたこと心より感謝申し上げます。